# 第３回山形県立博物館移転整備に向けた有識者懇談会の開催結果について

１　日　時　令和５年２月７日（火）　14 時～16 時

２　懇談会出席者

〇委員

泉　虎吉〔十世　泉　清吉〕(デジタルクリエーター)、小川　義和（国立科学博物館　調整役)、川勝　節子(株式会社コロン　取締役)、黒田　三佳(人材アカデミーローズレーン　代表)、笹館　郁乃（東北芸術工科大学芸術学部文化財保存修復学科)、佐藤　琴（山形大学附属博物館　学芸研究員)、菅井　昭（山形大学大学院理学研究科)、原田　祐馬（UMA / design farm　代表)、三浦　友加（料理家)、山川　唯美（山形ママコミュニティ mama*jam 代表)、ラーワー　ちひろ（絵本作家）

３　会議の概要

事務局から、第２回山形県立博物館移転整備に向けた有識者懇談会の主な意見の状況について説明の上、各委員から意見をお聞きしたのち、意見交換を行った。

【各委員からの意見】

■Ａ委員

・　実験的なプログラムの実施、データ、デジタルの有効活用が重要だと思う。移転までには 10 年かかるところなので、その 10 年の間にどんなことができるのか、開館までの取り組みとして具体的にどんなアクションをとっていけば面白いかを議論したい。
・　山形駅の周辺に簡易的なものでもいいので、拠点を設けられると良い。試せる場所というものが必要。実際アクションを起こしてテーマの中でトライアンドエラーをして結果をまわしていくということが大事。本当に簡単なもので良い。机と椅子一つずつ置くだけでも問題ない。博物館の収蔵品や写真、映像を iPad で流すだけでも十分なデジタル活用になる。
・　ハードウェアとしての実験場所という意味だけではなくて、もっと重要なところは、こうした拠点があることで、実体がある継続的な取り組みが今後もしていけること、コミュニティの維持、つながる場所にできるのが重要なところ。
・　将来的には、ディスコードとか Zoom などのオンラインツールを使ってコミ

ュニティを広げていくことを検討していくのが良い。

- しかし、オンラインのコミュニティの維持はすごく難しい。専門のコミュニティマネージャーがいてもかなり難しい。しかし、実体のある、リアルな活動があるとそのオンラインの取り組みも維持しやすくなるので、簡易な実体のある拠点があると良い。その拠点は、ファンづくりや情報発信にもつながる。リビングラボのような形で他の人との関わりの中において、実験をするということが非常に大事。
- なぜ駅前なのか、という点については、霞城セントラル１階の部分などを活用できれば良い。県で管理している場所や施設、スペースは実行しやすい。
- また、観光文化スポーツ部だけでなく、他部局とのコラボレーション、連携がしやすくなる。例えば、県産品や観光のプロモーションを行う際に、一緒に連携してイベントができる。
- また、駅の周辺は観光客が沢山いるので、そのような外部の目に触れるところに拠点や実験場があると意味をなす。
- どうしても観光という視点は、県立博物館を検討していく上で外せない視点になる。観光客などの外部の方の目に触れる場所で実現していけるとブラッシュアップされてくると思う。
- 直近での取り組みをどうするかというところにフォーカスした具体的なアイデアや企画を考えていくための分科会、ワーキンググループを組織して議論していくことが今後重要になってくる。
- 経済政策の側面も重要になってくる。経済学者だけを集めた分科会などがあると面白い。
- 私として協働可能なことは、企画の提案や実践しようとなった時の展示などのコンテンツ制作の技術的なところ、ビジネス的なところも含めて、サポートをできる。

■Ｂ委員

- 博物館省令の一部改正について、重要なことは、（博物館登録の）基準がある程度定まってきていること。事務局がまとめた資料の中で、目指すべき姿がいわゆる基本的運営方針に当たるのだと思う。そこを意識してまとめられたのかなと非常に感激をしている。
- 山形県立の新博物館が目指すべきものが何かということがある程度ここで整理されている。
- 今回の規則の中で多様な運営形態がある中で、この基準を設けましょうということが書いてある。改めて申し上げると、展示や資料収集、調査研究に対する基本的運営方針を設けること、ミッションをしっかりつくって、それを運営

できる人材を雇用し運営していく、ということが書いてある。

・　展示については、実物標本のみならず、デジタルアーカイブを使った資料を展示として認めようというように、幅広くなっていることが特徴的。

・　県立博物館が自然史だけではなくて、総合性を持っているということが非常に重要なことだと思う。山形の文化を担うという観点で、総合博物館のあり方というものをもう一度考えるべき。デパートメントストアではなくて、いくつかの分野が統合することによって何ができるかということを考えてはどうかと改めて思う。

・　フランスのリヨンに合流博物館という博物館がある。川（ローヌ川とソーヌ川）が合流している場所にある。コンフリュアンスというミュージアムであるが、そこはまさしく総合博物館で、分野が分かれて展示しているのではなく、統合的なテーマで、地質学とか考古学が展示してあったり、いろんな分野が統合的に展示されている。改めて「総合性」というものを考えてみる必要がある。

・　多くの博物館ではどうしても一つの分野に基づく展示になるが、総合性になった時に新しい分野、統合的な分野が生まれる。サイエンスコミュニケーションでも総合知というものが言われているので、統合して新しい知識をつくっていくということができるのではないか。この 10 年をかけて、博物館の総合的な博物館知ともいうような、総合性を持っている博物館の優位性をもっと主張していくのが良い。

・　そういう点では、先ほどご意見のあったラボラトリ＝実験施設をつくって、様々な人々の知を総合していくということ、それから学芸員が持っている、それぞれの専門性を総合していくというのは非常に重要な視点。

・　資料にまとめてあることがまさしくそういうことなので、是非この通り進めてほしいと思うし、10 年の中で５年間のうちに施行規則による登録博物館の再登録ということが始まるので、その間に基本的な方針をしっかり立てていく必要があるし、残りの５年間にはそれを具体的に進めていくべきと思っている。この会議で議論されたことを、是非皆さんと進めていきたいと思っている。

**■Ｃ委員**

・　博物館の利活用を改めて考えてみると、多岐にわたって収集をしているところだと思う。歴史や文化など全部網羅して収集して、次世代に引き継ごうという機関だと思う。ここには、山形のストーリーがものすごくたくさん詰まった状態で置かれているのが現状。博物館を利用・活用することになった場合に、どうしたらアクセスしやすいのか考えた。あらゆる産業、生活に関わりがあるものを引っ張ってこようと思ったら、誰でもアクセスして情報を引き出せば、欲しいものや新しい出会いにたどり着くものだと思っているが、現実はそう

はなっていなくて、各部署で色々な発信の仕方をしている。検索する方も、どこでどう調べていいか右往左往しているから、結局情報としてうまく引き出せていない。

・　博物館が担うべき機能は、デジタルとリアルの二つに分かれている。デジタルのところは何も博物館だけがやるべきことではないと思っている。例えば、観光に携わる人なども同じ場所に情報としてあげられれば、例えばハッシュタグみたいにワードをいくつか打ち込むと似通ったものが検索で引っかかってくるなど、情報が統一化されていると、直接探していない郷土料理や関連するイベントなどが引っかかってきやすくなる。利用者がどうしたら利用しやすいコンテンツになるかという方向からアプローチしていく方法もある。

・　デジタル技術は発展する。どんどん進んでいくので、これが全てではないといえる。更新しながら、小さい規模でやってみるというのは、使い心地も良く、アクセスさせやすい。

■Ｄ委員

・　私の専門はホスピタリティである。ホスピタリティというのは、よく、おもてなしという言葉で訳されることもあるが、それとはちょっと違った意味で、双方向に良い関わりを持つことによって、良いコミュニケーションが生まれ、相互に発展するという考え方がある。今後は、博物館においてもホスピタリティの視点が必要だと思う。

・　ホスピタリティの構成要素は、歴史と文化の継承・発信・教育等学び舎としての拠点の機能や色々な研究の究明ができる資料の収集と発信の機能、または交流の場としての機能がある。

・　また、人的要素として、ホスピタリティというとやたら愛想がいいとかそういうことを思いがちだが、そうではなく、働く方や研究する方が役割をきちんと与えてもらえることとか、その専門性を生かせる場があるとか、そういうことも含まれる。

・　物的要素として、インクルーシブやユニバーサルデザインという物的要素の確認も必要になってくる。

・　また、ホスピタリティの最終的なところは、他との差。そこは創造的要素として、山形県の博物館に行くとこんなことができるということ。心の豊かさとか、山形県にしかないもの、ここにある光を見にやってくる。

・　山形県にある博物館なので、山形県の魅力を発信して、みんなに分かってもらえる。色々な方が観光に来るだけではなくて、研究職を求めて、そして最終的には、移住定住のことも考えていく。そういう拠点である必要がある。ホスピタリティを踏まえて、皆で戦略を立てていけば、これだけ本当に豊かな歴史

文化、自然がある山形県は達成できる。

- ニューヨークの美術館で見た山形の手仕事。なぜかそれを知ったのは、日本ではなくてニューヨークだった。山形というイメージのよさ、山形に対する期待、山形の持っているものに対する敬意などが相まって移住をしている。そこから発信できるものは大きいと思っている。
- 県内の 4 地域の連携ということもあるが、シンガポールの美術館、博物館、ニューヨーク、パリ、色々なところと連携していく、それを同等のレベルで一緒にやっていく力が山形には十分にあるので、そういう場にしてもらいたい。
- 山形県の博物館からは山形県の素晴らしいブランディングが出来ると思う。

■Ｅ委員

- どんな博物館になったらいいか、博物館が担うべき機能について、専門家の意見交換の場として、もしくは専門家が来た時にも学びの場になるということが、魅力的になる。山形県の PR と学びを一緒にして、その専門家の方も、例えばこの分野だったら山形県立博物館が詳しいよね、というようになれば良い。
- 先ほど産業科学館のらせん状の階段を見て思った。それを例として、さくらんぼだったら、農家や品種改良に携わる研究者、もしくはデザイン面で関わる方、産地で有名な東根市や寒河江市など、さくらんぼに関連する職業の方がみんなで教育や調査研究を行い、これまでの歴史や、なぜさくらんぼが山形の名産品になったのかなど、意外と知らないことも自分で考えることで、今の現状や問題点、地球温暖化との関係、今後のビジョンについてどうするか、が見えてくると面白い。新品種の紅王が品種改良された経緯、様々な品種・種類が生まれていく過程もとても面白い。例えば、販売会をしたり、様々な主体との協働があっても良い。その展示をすることで PR にもなるし、今後の産業の活性化にもつながっていく。色々なさくらんぼに関わる業種の方が一つの展示を作ったり、テーマとして調査研究をしていくことで、面白い展示ができる。
- 博物館を開館するまでの流れとしてイベントがあると良い。芸工大は県外出身の生徒も多い。県外出身者が、山形市は古い建物があって良い、七日町はいつもイベントをやっているので楽しいと言っていた。都会と言われる地域の出身者から見ても魅力的な面というのがあると感じた。七日町や駅前の活用できるスペース、例えば文翔館ややまぎん県民ホールなど、使える場所が多くあるのでイベントがあると多くの人の目に触れられると思う。
- 資料中、視点 10 の多様な主体との協働という点では、東北芸術工科大学の文化財保存修復研究センターで収蔵品の管理や修復も見られると良い。

■Ｆ委員

・　一緒にどういうことをやっていきたいのか、という観点で話す。手元に「ななはく！2023 ソーレまちの記憶市」のチラシを配布している。2 月 10 日から３日間、山形市七日町を舞台に、イタリアボローニャに関するスタンプラリーやまちの記憶市をやる。山形大学附属博物館は、山形まちづくり株式会社、商店街の皆さんと急速に変貌し続ける七日町の風景や人々の記憶をファイル化して皆さんと共有しようという仕組みづくりをやっている。

・　先ほどもイベントがあった方が引きつけられるというお話があったが、２月と９月に、どういったものがあって、アーカイブを使って何ができるのかということを少しずつ皆さんと共有しながらやっていこうという取り組みを実施してきた。この取り組みには山形大学の学生も参加して、まず歴史文化を学んでいる学生が街の人にインタビューをしたり、残したいまちの風景を写真で記録したりというのをやっている。

・　今回は、のし梅の佐藤屋の７代目、佐藤松兵衛さんに来ていただき、子供の頃、山形の中心市街地がどんな様子だったか、お店の歴史などを語ってもらったり、市民の皆様に呼びかけて、アーカイブ・博物館資料として残すべきものは何かということから皆さんと一緒にやっていきたいということで、このような取り組みを行う。普通の方々も私たち専門家も近現代史、特に現代史を残すということはそれほどやってないので私達も手探りの状態。でも、それを皆さんと一緒にやっていきたいと考えている。まずは山形市を中心に、今後山形県内の市町村で、大小の差はあるかもしれないがやっていきたい。このような動きというのは山形の魅力を再発見、クリエイトしていこうという流れの中で出てくると思うので、世界からアクセスがしやすいようなプラットフォームを山形県として作ってもらえるといいのではないかなと思うし、一緒に協働していけたら良い。

・　総合博物館であるということ、ありとあらゆる分野が一緒になっていることが大事。さきほどのアーカイブの取り組みは、デジタルアーカイブの専門家や地理学の専門家など、分野を越えて文理融合型の先生方に参加していただいている。山大としても文理融合をこれから進めていくという流れがあり、実際にありとあらゆる方々に関わっていただかなければならない。その中核に山形県立博物館がなってほしいし、一緒にやっていきたいと考えている。

■Ｇ委員

・　視点６の災害への対応力強化のところで、例えばジオパークとの連携で考えると、博物館の役割としては大きく二つあるとされている。一つは、ジオパーク、様々なジオサイトという地質遺産とか文化遺産の中核施設となること。も

う一つは、ジオパークの一部、或るいは知のバックアップとしての存在ということ。

- まず中核となる施設に関しては、福井県立恐竜博物館、埼玉県自然博物館がある。例えば福井県だったら恐竜、埼玉県だったら日本地質学の発祥の地であるということでジオパークを盛り上げていく中核となる存在として位置している。
- 知のバックアップとしては、三陸ジオパークや山陰ジオパークなどは、３つの都道府県にまたがり、それらのそれぞれの地域・特色に合った学術的なバックアップとして存在している。新博物館では例えば、蔵王のジオパーク認定に関して学術面でバックアップができれば良いと考える。
- 災害という面に関しては、山形県防災学習館がある。災害や防災の体験ができるところだということで、行ってみたいと思った。雲仙普賢岳や阪神淡路大震災の断層を保存するような博物館など、災害の記憶を風化させないといったものもある。そのような防災の記憶を残していくというような役割になれば良い。
- 機能に関しては、地質学の研究において、研究室の学生が北海道の博物館の研究員・学芸員と一緒に，博物館の資料を用いて研究し、学会発表をしたり、論文を投稿した。広い範囲の地質図だと産業技術総合研究所の資料を参考にするが、さらに詳しい地域の地質や化石、鉱物といった資料は、博物館が出している調査報告やデータも研究に活用している。以上の研究に関することに加え，学会発表の会場を提供するなど、知の拠点というか、学術の拠点のような役割があるとうれしい。
- 開館までの取り組みについては、福井県立恐竜博物館がリニューアルするということで、その際にサテライト館として、例えば福井駅や名古屋駅に巡回展示をしているらしい。数メートルぐらいの比較的小型のフクイサウルスの標本の骨格を実際に置いて、博物館がリニューアルするという PR をしていて、視覚的に気付くという点で非常に良い。
- SNS や YouTube といった動画を利用し、コンセプトや展示作業をチラ見せする、メイキング画像を見せるような動画があっても面白い。また、国立科学博物館では、本館と言われていた時代の昔の展示を見られるアーカイブ、本館メモリアルという企画があった。新博物館でもやったら面白いと思う。
- 多賀城では、2024 年に創建 1300 年となり、奈良平安時代に政治・軍事の拠点だった多賀城の南門を復元している。また、仙台駅にレゴの模型を展示している。駅などでの PR は良いと考える。

■Ｈ委員

・　視点５の誰にでも利用しやすいインクルーシブな施設を目指すことについて、改めてインクルーシブデザインとは何だということを考えていく必要があると感じた。例えば、感覚刺激が強い世界は、医療的ケア児や音に過敏な子どもには、集中して自分の興味と出会えない環境である。そのようなものは今の時代に合っていない。説明が周囲の音で聞こえない環境では、何を見せたいのかということが伝わらない。館のコンセプトをきちんと持っておくことがとても重要。

・　インクルーシブは、施設の機能的な側面と考えられがちだが、最も重要なことは多様な視点を持って進めていくデザインプロセスだと感じている。改めて、プロセスも含め、一体となったデザインをスタートしていく必要性を感じた。

・　同時にやっていくこととして、改めて、まちをつないでいくことはとても重要だと感じた。今日も昨晩も山形市内を歩いてみたが、駅前と七日町周辺それぞれは頑張って開発し、まちづくりが行われているが、上手くつながっていなくて「歩く」という世界感がつくられていないと感じた。この季節なので、歩いている人がそこまで多くないということもあるが、まちを楽しめる環境作りを積極的にやっていかないと、博物館ができあがったとしても、点でしか盛り上がらず、面になっていかないという感覚を改めて感じた。この辺りは芸工大の馬場先生は専門性が非常に高いと思うので関わってもらったり、意見をいただいて、面的な、まちにきちんと広がっていく博物館として考えていくことが重要だと考えた。

・　さらに、建築の重要性がある。先ほどお話いただいたコンフリュアンス博物館も建築としても非常に力がある、目に留まるような建築になっていた。どういうふうに建築を決めていくかということもとても重要だと感じた。

・　自分が協働できることとして、仕組みとか取り組みをどうデザインしていくかやこのプロジェクトそのものをどう山形県としてデザインしていくかということ、一緒に熱中できるチームづくりみたいなことを一緒に考えていくことが出来ると考えている。

■Ｉ委員

・　山形県は農業王国であり、米の聖地である。日本全国の名だたる米の大元が山形県だが、全国的に知れ渡っていない。米や酒、味噌、発酵食品など色々なものが日本の文化として膨れ上がっている。

・　豆には面白い文化がいっぱいある。伝承豆の数や在来作物の豆の数もとても山形県内は多い。米と豆は連作障害になりにくいという事を山形大学の農学

部の方に聞いた。人間は、米と豆を大事に育てていけば、世界中がもっと平和になるという話も聞いた。SDGs にもつながるし、米と豆をもっとフューチャーし、そういう情報を自信を持って発信していければ山形県の魅力を紹介できる。

- 山形大学の江頭教授を中心に在来作物の研究会がある。その場で、在来作物の数は山形県が日本の中でもトップクラスだと聞いた。生産者の状況も厳しいので、県立博物館が在来作物にフューチャーし、在来の野菜を使った漬物など、部屋を設けて紹介できれば良い。学校などで山形の食文化についてがっちり教えたりするのも良い。
- 色々な業界で世代交代があるが、寺における世代交代で、今までは檀家以外には開けてないといった現状だったがもっとオープンにしていこうということになっている。檀家自体も減少しており寺の収入源が減っているので、一般の人に開けて、寺の魅力、仏像や調度品の紹介をしていきたいといった話もよく聞くようになった。そのような寺の住職が紹介して、またそこでつなげて、今度は自分のところに来てもらってという、幅広く関係性をつなげていくのが面白い。
- 博物館はどのように建てられているのかということが気になっている。、中を覗きたいと思う。それを定点カメラで、72 時間という NHK で人気の番組があるが、あのような感じで早送りでもいいので博物館の裏側をちらっと見せるような企画があると、ファンも増える。
- 前回の懇談会で県立博物館のバックヤードを見たが、展示していないものをお蔵入りスペシャル企画として展示したり、ポストカードにして、一つのアイテムとして販売するなど、博物館の大きな展示会では目に触れないけど、自由すぎるアイテムにスポットを当てるのも面白い。
- 先週末、出会ったぬいぐるみがある。ヤマガタダイカイギュウのぬいぐるみだそうで、ヤマガタダイカイギュウが発見された大江町で出会った。県民によって作られたクラフトなどを販売スペースで売ったら良いと感じた。

■Ｊ委員

- 前回の会議の後に、博物館と教育資料館等を見学した。それを踏まえて話したい。
- 新しい博物館をつくることを今後考えていくにあたって、古き良きもの、いつでもそこにあって自分たちの地元の象徴、安心感がある居場所が必要だと感じた。新しいものをつくるから時代に沿った斬新なものだけが全てではなくて、地元の方がいつでも、すぐそこにあって、安心して足を運べるような、少し田舎くささが残るものが良い。観光客や外向けの部分も必要だとは思うが、そこ

のまちに馴染むような要素を入れられたら良いと思った。

- 私たちのような子育て世代としては、生まれたときからその場所にあって、大きくなってもあって、自分が今度子供を産んだときにそこに連れて行く、孫の世代まで連れていくといった形で、自分の生活の中に一つ馴染むような要素があると良いと感じた。
- 県民にとっても、あそこに行くと観光客ばっかりで、といった感覚ではなくて、自分たちが主役になれるような居場所づくりも一つのポイントだと感じた。
- 丸ごと山形＝行くと山形のことが何でも分かる場所。食や文化など何でも分かる展示というのも必要。
- どう活用するか、役割などについては、ファミリー層向けの催し物や子ども達向けの催し物は確実に支持されるとは思っているので、そのようなものは定期的に開催する必要があると思う。さらには、女性たちの自己研鑽の場といった要素も必要だと思う。少し博物館には足が向きにくい場合もあると思うので、そういった層を掘り起こす意味もある。
- 開館までの取り組みとして協働可能なこととしては、母親たちのコミュニティを運営していく上で、地元の子育て世代が足を運びやすいような催事を協働して運営・企画するなどといったことが出来ると思う。

■Ｋ委員

- 博物館の役割･機能については、かなり多様だと思うが、一つ大きなものは、学ぶことを楽しむ、知識欲を満たす場であること。前回の懇談会で県立博物館の企画展「女神達の饗宴」を見た時に、学芸員の熱意を感じることが出来て、これだ、と思った。そういう熱心さや情熱に他との差別化があると感じた。
- 現在、私が情熱を捧げているものが「木の根アジャイルラーニングセンター」である。鮭川村木の根坂に空いている分校があり、その分校をお借りして、子供も大人も学びたいことや自分が興味のあることを納得いくまで、深く学ぶことができる場所をつくりたいと思っている。
- アジャイルラーニングセンターでは、フィールドワークやサマーキャンプなどを行う際に、子ども達の調べものや学習として博物館や美術館に課外授業に行きたいと思っていたので、一緒に色々な事が協働できると思う。
- 絵本を作る際にはストーリーや物語の力がすごく大きい。県立博物館ではヤマガタダイカイギュウ物語があるとすごく面白いと思っている。子どもの利用促進や集客、ファンの獲得に資する。
- 私はパッションの人間。データや統計も大事だが、暑苦しいような熱意も人を引きつけることになれると思っている。

**【意見交換】**

- 「アジャイル」という言葉はすごく良いと非常に感動した。昔、アジャイルミュージアムというテーマで明治大学にてシンポジウムを行った。変化する、いつでも変わっていく、こだわらないという事がすごく重要。大学と違って博物館は一般の人が入館して話ができる。一般の方はどういう意見を持ってどんなふうになっているか、それに対して博物館はどうするのかという、このコミュニケーションが進んでいくことでインクルーシブが生まれてくる。繊細なルームを作って、ほとんど刺激がないような部屋をつくることも重要なことだが、これも一般の方と一緒につくっていくということ、コミュニケーションのプロセスを大事にすることが重要なこと。アジャイルという言葉が最後のまとめで出てきて非常に良かった。
- まちづくりと博物館という話があったが、これはポイントになってくる。まちの中に博物館を置いておくのではなく、まちの中での博物館。これは一般的にエコミュージアムに近い概念になってくる。フランスで生まれた言葉。博物館がまちの中にきちんと位置付けられ、まちの文化を支えていく、人々の生活を支援していくという発想。日本の場合はミュージアムを博物館と翻訳して、「館」という名前がついてしまったので、どうしても建物というイメージがあるが、これを変えないと、それこそアジャイルしていかないといけないと感じている。博物館、館という考え方はあるが、機能であって、まちの一部であって、という考え方で新構想を考えていければ良いと思う。総合性を重視しているということ。
- 「総合性」については、分野の総合性だけではなくて機能の総合性。いわゆるリアルとデジタルとか、そういうものを組み合わせること。それから学びも色々な学びがあるので、技術的な学びと感性の学びは違うので、データに基づいて学んでいくことと鑑賞に基づいて学んでいくこと。学びも一つの方向ではない。そういう意味での総合性は非常に大事。
- サンフランシスコにあるエクスプロラトリウムという体験型科学博物館がある。オッペンハイマーがつくった。エクスプロラトリウムのミッションを見ると分かるが、サイエンスとアートがこの世の中を理解し表現する方法だと書いている。やっぱり総合性、統合性が重要だと思う。
- そういう点では、博物館法施行規則の中で、他の博物館と連携して調査研究等を行う、単独もしくは他の文化施設との連携を求めて調査研究を行うという観点では、芸工大と連携し文化財保存に関する、例えば大学の先生を学芸員と兼務するなどといったことも考えられる。また、学芸員側も大学の教授や准教授と兼務してもらうことで科学研究費が助成してもらえるなどといった工夫もできると思う。人材においても他との連携をしていく。博物館を柔軟に考

えたら良い。アジャイル思考で考えていけば良い。

- 分断と言ってしまうとちょっと言葉は強いが、少しそういった雰囲気を感じるところはある。博物館単体で、何かを成し遂げようという事ではなくて、協働、色々なプレイヤー、事業者の方達と一緒にみんなで地域や経済、社会を盛り上げていこうという方向でやっていけると、みんな幸せになれる。
- 商業施設やホテル、飲食店など周辺施設やバスやタクシーなどの交通を一体として考えて、どうやったら、まち全体が一つものとして盛り上がっていけるのかということを考えていけると良い。交通政策や経済政策と連携ができれば、１％フォー・アート（※公共工事、もしくは公共建築の費用の１％をその建築に関連・不随する芸術・アートのために支出しようという考え方）のような仕組みによって施設が外部と連携してやっていこうということになるし、地域内でお金が循環してる形になるので、地域内の損失がなく経済的にも良い構造だと思う。
- 県が主催となると色々なハードルがあったり、準備が必要で難しくなってくると思うので、主催は有志がやり、そこに対して県は後援やサポートを行うという形にできるとスムーズに進むことがある。県企業振興公社やスタートアップステーション・ジョージ山形を活用して、やりやすい形をつくっていくのが良いと思う。
- また、企画やイベントの持ち込み場のような所をオープンにしておくと、色々な形で企画が持ち込まれて、そこでどんどんやってもらうということが出来れば、自然に情報も人も集まってくる。そこからまた、次のことを考えていけばいいと思う。

- 博物館がまちに広がっていくということはまちで暮らしている人たちに近くなるということ。近くなるための方法・デザインを考えていくということが重要だと改めて思った。
- 博物館＝ミュージアムは、自然や先人の知恵がそこに詰まっていて、本来は生きる力をもらえる場所だと思う。そのことを考えると、どういう空間をつくれば良いかとか、どういうコミュニケーションを取れば良いかということも含めて、まちづくりの拠点にもなっていくような博物館にすることで、まちと直接接続しているような場所であったり、行政の課が常に行けるような場所になっていたりと、本当にまちと地続きになっている場所になっていくと、他の人も来やすくなる。関わることのできる場所としてどう考えていくか。改めて、やると面白そうだと感じた。

・　まちづくりを担うという視点と、一方で山形県という大きな視点や山形県内の４地域という視点がある。地続きになっていくということは、自分が住んでいる所、もっと広い４地域、山形県全体という捉え方がある。双方向性という話もあったが、４地域の双方向性ということも重要になってくる。地域の捉え方は多面的であるので、自分の住んでいる所、４地域、山形県全体、それぞれのフェーズで相互の双方向性が生まれるような、ちょっと抽象的な話だが、山形県立博物館と考えた場合にその点が重要だと思う。

・　これは非常に大きな問題、どこでも抱えている課題である。地域博物館としては、市や町などの地域に根差した活動が出来るが県立博物館はなかなか難しい。国立科学博物館は、国立なので台東区や東京都だけではなく、地域性が少なくなっている。どこの県立博物館も悩んでいると思う。
・　県全体を見なくてはいけないという部分と、山形市にあるから山形市に根差した部分、山形市内の利用者が多ければその方に合わせた活動という部分もあるし、ここのバランスを取っていく必要がある。
・　山形県内博物館のネットワークの中心になることはとても重要なこと。デジタルアーカイブや出張出前博物館、資料の貸し出しなど、色々な手段で山形県内の地域博物館のネットワークの中核となってほしい。一方で、山形市に根差した博物館として、例えば都市の博物館と山村の博物館では全然違うので、都市型の博物館のあり方のモデルとして、どんな事をしたら良いかということをやってみて、他の博物館の模範になるということも良いと考える。

・　山形大学附属博物館は山形市内で一番古い。山形県立博物館より古くから存在しているし、総合博物館なので昔から相談相手にはなってきた。県内博物館はそれぞれの館で課題も違う、しかし共通で抱えている課題もあるという中で、自分達だけでは解決できない問題というのがあって、そこは横のつながりで何とかしてきた。実際、この「ななはく」も、山形市郷土館と最上義光記念館が協働してアーカイブをつくるというもので、一つの館でデジタルアーカイブを作るのはかなり困難だが、お互いにそれぞれ得意分野を生かしながら一緒にやっていけばうまくいく。
・　宮城県の東北歴史博物館は宮城県立の人文系博物館。市町村では難しい保存のための専門人材がいたり、保存処理のための設備があったりすることで各市町村の方は助言を得たり、処理をお願いしたりできる。県として、山形県全体の博物館をバックアップするような、そういう機能を持ってもらえると良い。

・　始動する前段階のラボを作るという話について、それはもうずっと続けていけると感じた。ちょっと特殊なその土地ならではのものだけど、もしかしたら、色々な地域の方や研究されている方、農家の方が知りたい情報かもしれないというところは、小さいラボが無数にあることで結びつきがたくさん生まれて身近な自分事として、博物館を考えられるきっかけになりそうだと感じた。どうやって生活の中に関連付けるかが大事。
・　博物館という言い方が、今後もしかしたら変わるかもしれないが、これは新しくつくる必要もあると感じている。新しい呼び名でもっとカジュアルに、でも、大切に思っていることが伝わるような活動として、今でもすぐ出来ること。こういう場所で活動しているということが幾らでも言える。どんどん始めたら良い。

・　県内博物館とのネットワークについては、連携するための県と市町村間の手続きの問題など、うまくいかないことがあるかもしれないので、ラボ＝実験場を県立博物館として一つ用意して、それぞれの博物館別に用意して、ラボ同士で連携するのも良い。そこでネットワークを強化していく方法もある。そのネットワークは、デジタルでの情報連携という面もある。
・　スタートアップステーション・ジョージ山形は、コワーキングスペースになっているが、県内にあるコワーキングスペースを Zoom で常時接続をしていて見える状態になっている。例えば、ラボ同士をずっとつなげてしまうとか、それぞれ連携して企画をつくってみるとか、それを続けていくことによってそれぞれの地域ごとに特色のある形になっていく。最終的に新博物館をつくるときに落とし込んでいくということができると、最初のやり方、進め方としては面白いし、やりやすいと思う。

・　山形大学附属博物館はまさにデジタルアーカイブに取り組んでいるところ。実物を見る、体験するということは博物館の機能として不可欠なところだが、スペースが必要になる。そこまで行かなければいけないということがある。それは、ある意味公平ではない。
・　これからの社会問題として、少子高齢化もさることながら格差の問題がある。それは物理的なアクセスだけではなく、教育環境もある。多様な人と一緒につくっていく博物館でなければならない。その場合、その立場によってアクセスしやすいチャンネルがあって、その中の一つがデジタルであるということ。そういう意識で、お互いに使い分けていけば、バーチャルとリアルはぶつかり合うものではなく、融合的にやっていけるもので、そこは問題ない。
・　デジタルアーカイブの技術はどんどん進歩しており、安価で色々なことが出

来るようになっているし、インフラとしても、Zoom で繋がることもできるようになっている。ただ、資料をデジタル化するという段階がすごく大変。

- さきほど、古い博物館の展示を残しておきたいという話があったが、それを３D、360 度カメラや VR などでそんなに費用もかけずに残せる。そういうことをやらなきゃいけないと気づいて取り組むということが非常に大事。これは、本当にすぐに始めたら良い。このようなことに気づけるようなこういう話し合いやワークショップなどを行って、気づいたところから残していく、アーカイブしていく、発信していくということが大事。そういうことをこれから 10 年、完成までネットで配信し、実物展示もやるといった、両輪でやっていくことが出来そうで効果がありそうなことなのかなと思う。

- 例えば、学校教育だと GIGA スクール構想があって、反転授業と言われる、自分で調べてきて学校で議論するという方向に変えるという流れになっている。自分で調べる時にデジタル化されている博物館があれば、今まで学校教育と社会教育、インフォーマル学習とフォーマル学習は違うと言っていたが、デジタル上では同じ学習空間になる可能性もある。子ども達にとっては、ゲームも博物館も学校も同じデータ上での話になっている。大人も含めてそういう可能性が広がっていく。
- ただ、博物館として、実物があるということはどういう意味なのかということを、我々はもう一度考えなければならない。見に行って、触れて学ぶという時代から、デジタルで見ることができる、しかも、今後はアバターでデジタルツインを作って、国立科学博物館を VR で見ることもできるようになるだろう。それによりかなりのことが体現できる。では、実際に行くことや実際に触ってみることの意義は何なのか、今後学びとしての大きな問題になると思う。
- もう 1 点は、社会性の問題がある。日本は今まで均質な教育をしてきた。しかし、世界的には均等にしていこうということがある。日本は逆の方向にいっているような感じ。やっぱり均等性、誰でも教育を受ける機会、デジタル化によってそれを逆進するのではなく、それを保障していく。それは、インクルーシブの問題もそうだし、身体障がい、経済的など色々な問題で博物館に来られないような人たちに手を差し伸べるという意味でもすごく重要。そこの考え方を博物館が持って、これから議論していかなくてはいけない。

- デジタルアーカイブには力を入れた方が良いと改めて思っている。本はすごくプロダクトとしての完成度が高いと思う。もう長いこと本は作られ続けてきているが、デジタルアーカイブは、まだまだ未完成な分野だと思っている。
- 最近、ある福祉法人の 50 年をまとめるお手伝いをしたが、20 年ぐらい前か

ら、情報がほぼデジタル化されているので、写真がもう圧倒的に見当たらない。解像度も相当低く、昔のプリント 1 枚ある方がよっぽど解像度が高いというような状態があった。相当色々なことを考えないといけないとその時改めて感じた。

- そういう視点で考えると、デジタルアーカイブを考えていくことには、県としてきちんと予算と人材を投入して考えていく必要がある。未完成なものだからこそ力を入れていくということを県が引っ張ってくれると良いと思った。
- 医療的ケア児の話もしたが、支援法が整備されているので、保育園や幼稚園で普通に一緒に学べる環境がつくられてくる。その時に、その子たちも一緒に博物館に来ることもあるし、本当は行きたけど行けない環境の場合、デジタルでどういう体験がそこに待っているのかということを考えていくことを、行政が旗を振ってやっていくと良い。

- デジタル化されていく中で、なぜ博物館に行くのか、その意味は何かということを考えた。デジタルアーカイブを自分が見ようと思ったときには、みたい作品がある時だと思う。逆に、それ以外にあまり興味がなかったら、素通りしてしまう。しかし、博物館に行ったら、見たいもの以外のものも目に入ってくる。本屋でも欲しいものがなかったらアマゾンで探そうかな、と思うが、実際に本屋に行くことでそれ以外の関連した書籍とか、興味がなかったけど意外と面白そうだと感じたものとか、そういう新しい発見や違う興味が生まれることがある。美術館展示のポスターの真ん中に据えられている作品を見たくて行ったけど、常設展にある他の作品もよかったとか。偶然の出会い・学びみたいなものが、やはり行くことによって得られると思った。
- あとは、どうしても自分の目で見たいという気持ちが強くある。自分の目よりいいカメラはたくさんあると思うが、それでも自分の目で見たいと感じる。また、学芸員が展示している中でどういう配置にしているのか、掛け軸は、デジタルでは装丁の布の記録はないので、それらの作品全体の雰囲気を見たいと思う。これは実物を見ないと得られない。

- デジタルアーカイブやコンテンツ以外の視点で、博物館の経営や運営など、コミュニケーション、インフラなどの分野でのデジタル活用も重要。単純にインターネット回線が安定しているなど、というところを含め、適切に設定されているかという点も重要。いわゆる企業の DX 化という点で、情報の伝達であったり労務管理など、そこを簡単にできるようになると負担が減って、効率的に業務へ集中ができるといったようなデジタル化も重要。今後、そのような議論が出来ると良い。

・　山形大学附属博物館のリニューアルをするために、台帳を作るアルバイトで化石や鉱物の標本をリスト化した。しかし、人員不足で大変だった。それを博物館業務で考えると、研究に専念できるようにするためにキュレーターやサイエンスコミュニケーターなどの職種など、色々な職種の方がいると運営面でも効率的だと感じた。

・　本当にいろんな人が関わった方が良いと感じている。人によって資料のどこがポイントとなるのか全然違う。そういうものが集合していくのが総合知だと思う。しかし、必要な人すべてを雇用することは難しい。周りの研究機関であるとか市民の皆さんと協働して、やれる主体とともにやっていくという方向につなげられると、自分の博物館＝ミュージアム、山形の皆さんのミュージアムだということでスタートが切れると良い。

・　ホスピタリティあふれる博物館、機能的、人的、物的、創造的に照らし合わせ、この博物館があるから山形を訪れたい、また地元の方々は、そこから山形の良さを実感できる場所にデザイン、人材育成することが大切だと思う。山形県に居住する方はもちろんのこと、県外の方にも、バーチャルだけでなく（そこからつながり）、実際に来てもらうことが大切。
・　魅力的なワークショップの開催、山形県に生きる方を先生に迎えること、展示や資料で学んだことからつながるここでしか味わえない魅力的なカフェ、ここでしか買えないものを扱うミュージアムショップ、など、そこから県内各地を訪れたり、観光、研究、移住にも発展していく可能性があると思う。点を線から面にする仕組みを戦略的に行うことが大切だと思う。山形の魅力の根源のなぜ！がわかる場所になると良い。